

「辛い記憶だけが残っています」

辰巳 ふさ子 （86歳）

私は、1933年兵庫県川辺郡西谷村（現在の宝塚市）で生まれ、18歳までそこに住んでいました。1945年の終戦時は12歳で、国民学校6年生でした。日常生活は勤労奉仕の毎日で、同学年の生徒全員が、午前10時から午後4時頃まで、深い山の中に分け入り、大人たちが木を切って束にした薪を、背中に背負って麓に下す作業に従事していました。子どもの身体にはかなりの重労働で、辛い作業でした。先生から、「この仕事は御国の戦争の銃後の守りですよ」と教えられていました。その間、教科書はありませんでしたので、勉強することは一切ありませんでした。当時尼崎から集団疎開で50名くらいの子が来ていて、お寺で寝泊まりしていました。その子たちと一緒に勤労奉仕をしていました。先生は「みんな仲良くしてくださいね」と言っていたのですが、お寺に帰るときは本当に寂しそうなのが可哀想で、自分は田舎に生まれて良かったな—と思いました。

夜は灯火管制が敷かれており、空襲警報が鳴ると電気を消し素早く防空壕に逃げ込みました。ある昼下がりに突然、空襲警報が鳴り、低空飛行の機銃掃射がありました。急いで木の下に逃げました。逃げ遅れて即死した方を目の当たりにしました。大人も子どもも本当に怖い目に遭いました。一步間違えれば私も命は無

かっただろうと思います。

私が小学校４年生の時、15歳上の兄は出征しました。西谷村大原野神社で300名ほど集まり、兄のために出征兵士を送る会が催されました。みんなの気持ちを込めた千人針が手渡されました。出征後、ビルマから兄の手紙が届きました。手紙には検閲があったそうで、苦しいことは書かれてなく、元気でやっていますとされたためられていました。

戦争が終って、役場から兄が戦死したという紙切れ一枚が入った遺骨箱が送られてきました。母は仏壇にその箱をお供えしましたが、「この息子の命は何だったの」と泣き崩れていました。戦後農業に従事して生計をたてていました。そのかわり、母は箕（み）（穀物を選別するざる）を作ることが上手で、それで私たちの暮らしを支えてくれていました。

戦争はするべきものじゃありません。争い事は話し合いで解決したらいいと思います。戦争に勝ち負けはありません。